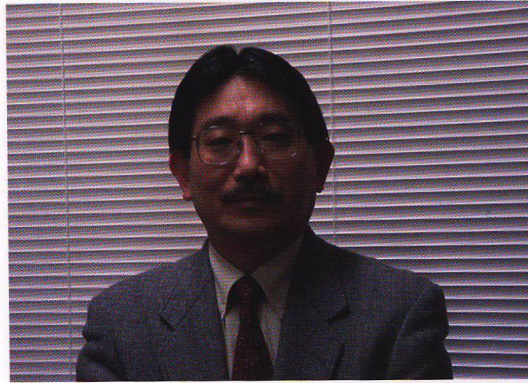


卒業生へ



大学院地域文化研究科長

立石 博高

卒業生、修了生の皆さんへ

卒業生、修了生の皆さん、おめでとうございます。

この厳しい時代のなかで皆さんに月並みなお祝いの言葉を述べるのは止しましょう。むしろ、一つの「警句」を約400年前の短編小説からご紹介しておきます。それは『ドン・キホーテ』で有名なスペインの作家セルバンテスの「ガラスの学士」というお話です。

トマス・ロダーハという若者は、軍隊生活を終えて苦学ののちサラマンカ大学法学士の学位を授けられます。しかし、一目惚れした女が彼の気を惹こうとして与えた媚薬の入ったマルメロの実を食べた結果、自分の体がガラスでできているという奇妙な妄想に囚われます。そのため誰かが自分の方にやってこようとすると、「自分は普通の人間と違って足の先から頭のとっぺんまでガラスでできている」ので「触るとこわれてしまうから、どうか近寄らないでくれ」と嘆願する始末です。

そこで人々は面白がって彼にさまざまな質問を投げかけますが、ガラスの学士は警句を交えて社会慣習やもろもろの職業に対して実に鋭い批判を披瀝するのです。たとえば、学校の教師について意見を求められると、「あれはいつも天使を相手にしているのだから、実に幸せな人種だ、それにしても、あの鼻をたらしした天使たちに、いま少し聞き分けがあったら、教師たちは掛け値なしに幸せだろう」と言い

ます。

こうして自分をガラスと思う狂気と入り混じった警抜な言葉は、人々の大きな関心を呼びます。ところが2年数ヶ月が経ったとき、ある修道士の治療によって学士は元通りの正気に戻り、以前の才気と理性を回復します。そして、学士は人々に「これまで皆さんは、あちらこちらの広場で私に質問をなさいましたが、これからは、私の事務所で質問していただきたいと思います。そうして下されば、かつて即興で明快な解答を与えていたといわれるこの私が、これからは熟慮の上、さらに見事なお答えをしてさしあげることができましょう。」と言いましたが、その後の彼は見向きもされなくなるのです。

おそらく皆さんは、警抜な言葉をもつ学士となられました。これからは、それぞれの才気と理性をどうやったら社会のなかで活かせるかが真剣に問われるでしょう。ときには「賢明な狂人」たる必要もあるでしょう。社会人としての皆さんのご活躍を心より願っております。